

『方言資料叢刊』を用いた全国挨拶行動の 言語行動学的・方言学的研究

齋藤 孝 滋
森 節 子
工藤 香寿美

フェリス女学院大学「地域言語調査」会

大井友紀子 澤井あかね 竹川麻由子 千葉雅子 天野英里子 新井ふみ子 石井希和
奥村明子 熊澤美幸 小島祐子 園田由香 高市敬子 西川英里子 本間滝子 宮内利
奈 宮本優香 和知亜希子 梅垣佳子 代田愛 木村奈歩 田中裕子 中津川綾子 今
井祐子 後閑麻子 齋藤真弓 西瑞穂 三田友香 守永さつき 三浦佳子 柳下恵 織
田めぐみ 加藤菜摘 小出幸代 寺田明子 山上貴子

1. 総論

1.1. 目的

本研究の目的は、共通項目によりほぼ全県の待遇行動を網羅した方言研究ゼミナール幹事会編（1997）『方言資料叢刊 第7巻 方言の待遇表現』（方言研究ゼミナール）（以下『方言資料叢刊』と称す）を資料として、全国に挨拶行動の選択規則について、①言語行動学的視点による共通性と個性の抽出と②総合的類型化を試み、さらに③累計パターンと地理的位置との相関関係を方言区画論的・言語地理学的視点から明らかにすることにある。また④各表現構造要素における敬語形態の場面別出現傾向の分析も行う。

1.2. 方法

分析対象は『方言資料叢刊』の「IV-3. 位相による待遇表現」の項目で以下のとおりである。

朝9時頃に、近くの道路で、次に挙げる人に出会ったとき《A》どのように挨拶しますか。そして、その後《B》「どこへ行くのか」を尋ねるのにどのように言いますか。実際に出会ったときのことを想像したり、思い出しながら、詳しく教えてください。1. お寺の住職さん 2. 校長先生 3. 見知らぬ年配の男性 4. 見知らぬ年配の女性 5. 顔見知りの年上の男性 6. 顔見知りの年上の女性 7. 歳ほど年下

の見知らぬ男性 8. 10歳ほど年下の見知らぬ女性 9. 同級生の男性 10. 同級生の女性 11. 10歳ほど年下の顔見知りの男性 12. 10歳ほど年下の顔見知りの女性 13. 近所の中学生の男の子 14. 近所の中学生の女の子 なお、話者は、70歳前後のその土地生え抜きの女性である。

目的①・②のための分析には、Ervin-Tripp, S. Ervin-Tripp, S. (1972) "On Sociolinguistic Rules: Alternation and Cooccurrence" Gumperz and Hymes, eds. *Directions in Sociolinguistics*. Holt, Rinehart and Winston. で用いられているフローチャート方式の方法を用いた。具体的作業としては、まず第1段階として、調査地点ごとに個別に挨拶行動選択規則をフローチャート方式で見出す作業を行った。この段階で、地点ごとの挨拶行動選択規則が見出せるのであるが、同様の説明力と簡潔さをもった複数の規則案が見出される可能性がある（実際に少なからずあった）。しかし、どの規則案がよ妥当性の高いものであるかの判断はこの個別的な分析段階では困難である。次に第2段階として、個別に見出された各地点の規則案を総合的視野から考察し、共通性と個別性を抽出しながら、全地点のプロトタイプ規則を見出す。第1段階において同時に複数の規則案が見出された場合については、プロトタイプ規則により近い案を妥当性の高い案として採用する。この段階で全地点の規則は、プロトタイプと同様か、異なる場合でも、プロトタイプに補足規則を付加するか、あるいは一部の規則を削除することで説明可能となることが期待されるのである。目的③のための分析には、先行研究による成果を踏まえつつ、各地点の規則パターンと地理的位置との相関関係を地理的方言区画論的・言語地理学的視点から明らかにすることにある。目的④については、3で述べる。

なお、本研究における作業分担は次のとおりである。研究発案・計画（目的①～③）は齋藤が行った。その中で目的①②に関わる第1段階は発表者を含むフェリス女学院大学「地域言語調査」会メンバー全員が分担してあつた。第2段階は第1段階で得られた成果について、メンバー全員で議論した上で、主に森が分析にあつた。目的③に関わる分析・解釈も①②の成果を用いて森が行った。目的④は、①②の成果を用いて工藤が見出し考察を行った。

[以上齋藤執筆]

2. 挨拶行動の選択規則

①挨拶行動バリエーションの使い分けには、相手に関して、一般的に「面識があるか > 社会的地位があるか > 自分より年上であるか > 同級生か下級生か > 成人であるか」の順で強い影響力が認められる。②選択規則パターンは概して東西対立分布をなす(西部:

複雑パターン、東部：単純パターン）といえそうである。なお、使用語形については、従来の報告とほぼ一致し、特に新発見はみられなかった。 [以上森・齋藤執筆]

3. 挨拶表現「どこ・に・行くのか」の各該当部分における敬語形態の場面別出現傾向

3.1. 目的

挨拶行動のうち「どこに行くのか」をたずねる場合、敬語形態のあらわれる箇所は a 「どこ」、b 「に」、c 「行くのか」の3つ部分と考えられる。ここでは、a～cの部分について、場面による敬語形態の出現傾向を明らかにし、各部分が担っている待遇上の意味を考察する。

3.2. 方法

「どこに行くのか」をたずねる場合のみに注目し、最も敬意が高いどちら系、助詞あり、敬語ありの使用率を出し、グラフに示した(図)。1項目について複数回答が見られた場合は、そのいずれかにどちら系・助詞・敬語が確認されたらどちら系・助詞あり・敬語ありとして処理した。どちら系として一括したのものには、ドチラー、ドチリヤー、ドッチ、ドチラサマ等があり、敬語とは、イキマス、イカレル等とイグノス、オデンスカ、オデカケースワズカナモ、イカハル、イキナハーマス等を含んだものである。

3.3. 考察

どちら系、助詞あり、敬語あり(以下、順に a、b、c とする)ともに、使用率の高かったのは校長先生(場面14、(以下、番号のみを記す)、お寺の住職さん(13)の順で、対象者が社会的地位の高い場合であった。同様に、特に b、c で使用率の高かったものに見知らぬ年配の男性(1)・女性(2)がみられる。また、顔見知りの年上の男性(9)・女性(10)に対しては、a、b では使用率が低い c ではある程度の使用が確認され、逆に、a、b では高い数値を示したものの、c では0%という結果となったものに近所の中学生の男の子(7)・女の子(8)があげられる。これらのことから、c は社会的地位が高い、または年上の場合であり、待遇上の上下関係が存在することによるが、b はそのほかに、現在教育機関に関わっているかどうかで、関わっている場合は規範文法を意識することによると考えられる。また、a、b、c のどの場合においても低い数値しか認められなかったものに、10歳ほど年下の顔見知りの男性(5)・女性(6)、同級生の男性(11)・女性(12)があり、これらは親密度と関係していることが推察され

る。以上より、aは、b、cの特徴のほかに面識の有無が関与するものと解釈することが可能である。

3.4. まとめ

以上のことから、次のことが言える。

- ①大きな男女差は認められない。
- ②面識があって年齢が同じか年下の場合は、敬語を用いることが少ない。
- ③最も敬意が表現される部分は動詞である。

(単位：%)

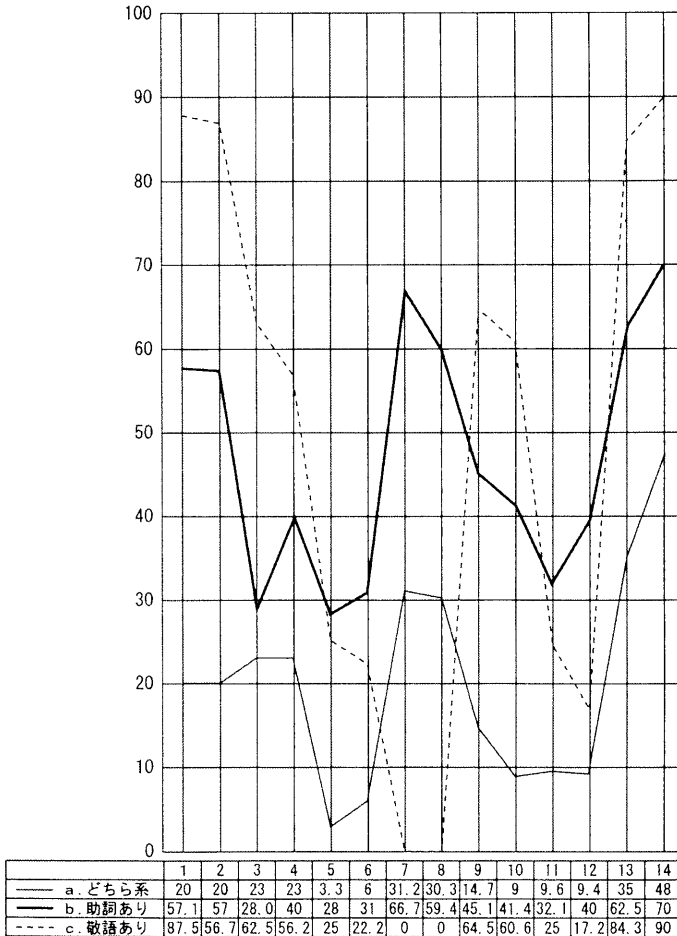


図 a. b. c の使用率

- ④動詞には、社会的地位や年齢差が影響される。
- ⑤助詞を用いるか否かは、④のほかに現在教育機関に関係しているか否かが関わっていると思われ、関わっている相手に対しては、規範文法を意識して発話する傾向にある。
- ⑥どちら系を用いるか否かは、④⑤+面識の有無が関係するものと考えられる。

[以上工藤執筆]

4. おわりに

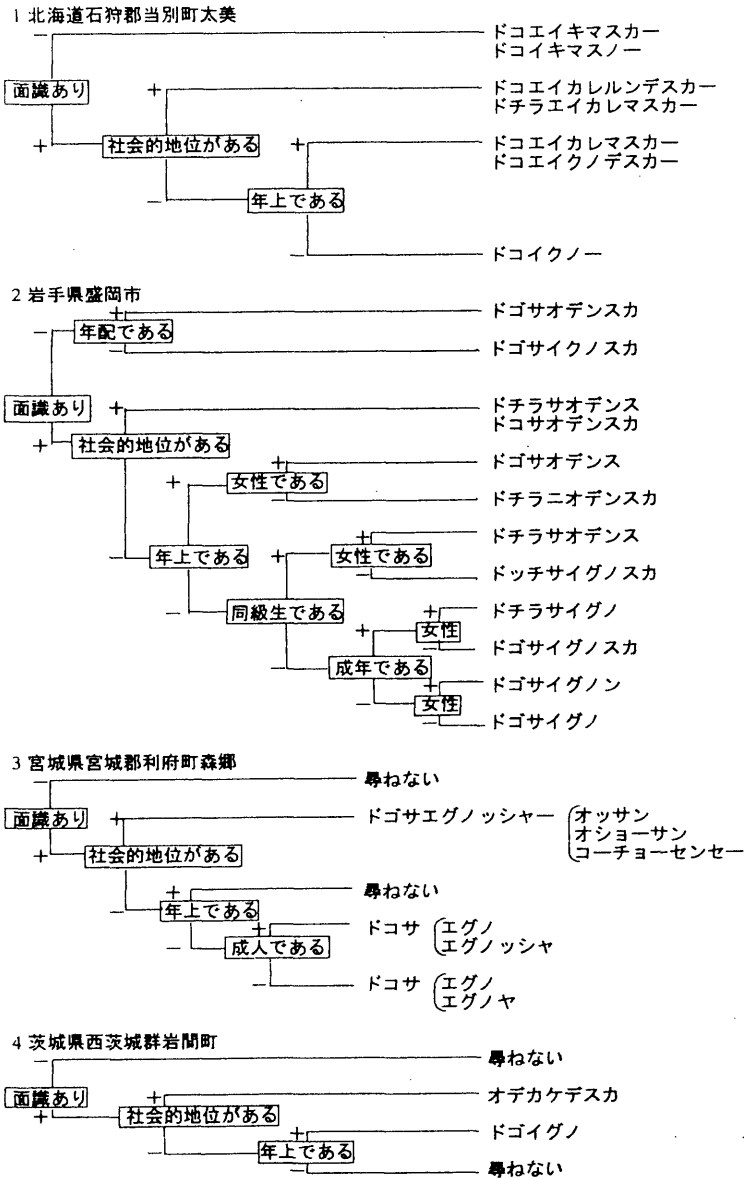
本稿は、氏名銘記のメンバーによる共同研究であるが、今後、各メンバーによりさらに発展させることが期待される。

[付記] 本研究は、フェリス女学院大学「地域言語調査A」、同大学院「現代日本語学演習A」(共に齋藤担当)における成果であり、第3回社会言語科学会(1999年、1月31日、於日本女子大学)にて口答発表したものである。

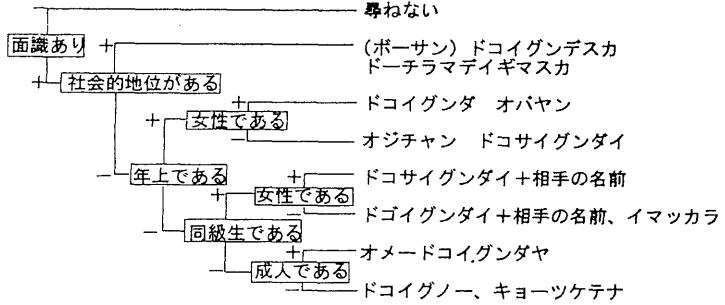
(さいとう・こうじ 本学助教授)

(もり・せつこ 東京YMCA英語専門学校 本学文学部2000年卒業)

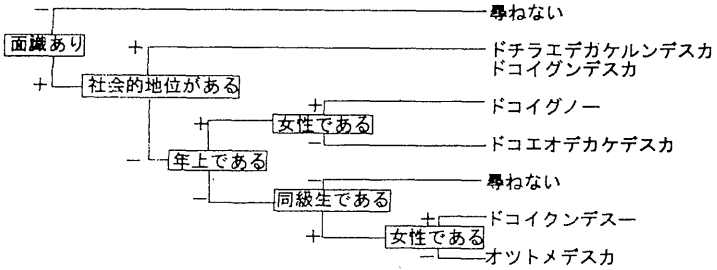
(くどう・かずみ 本大学院人文科学研究科2000年修了)



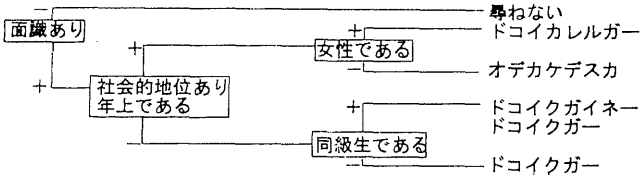
5 栃木県塩谷郡氏家町上岡久津



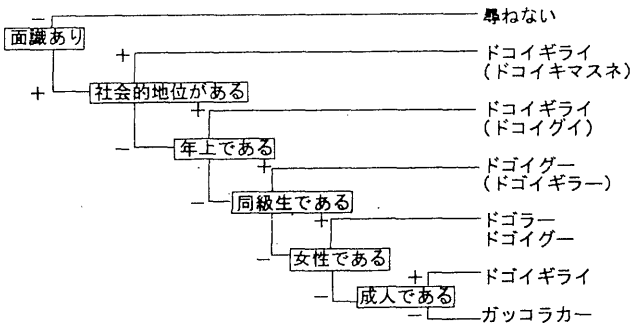
6 群馬県淀林市

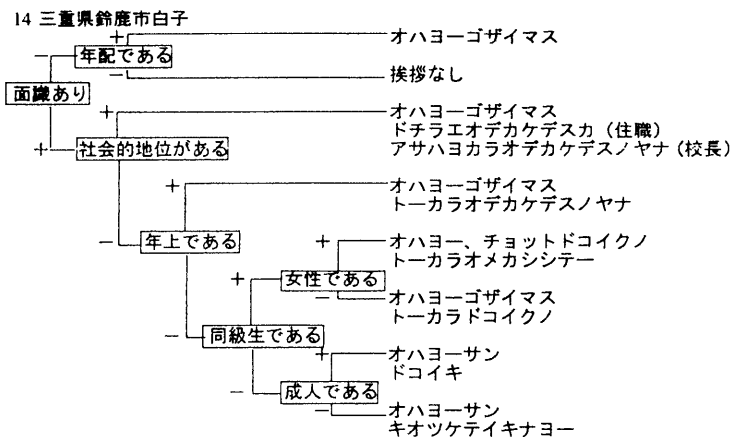
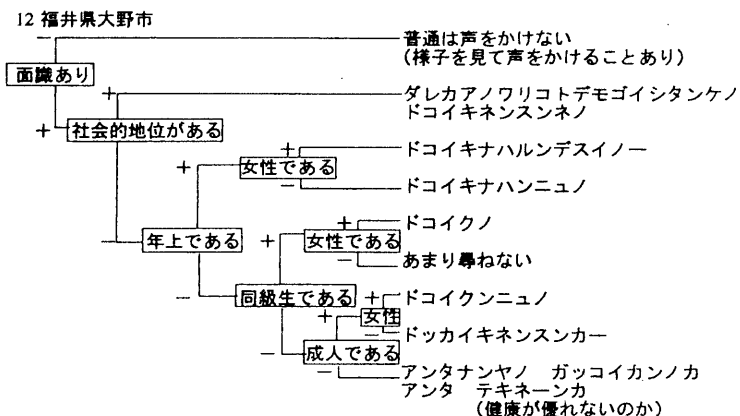
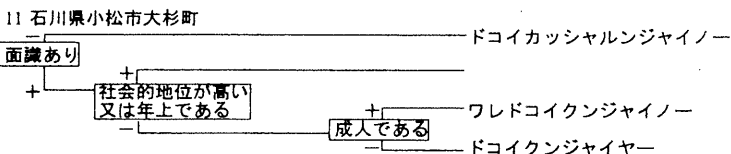
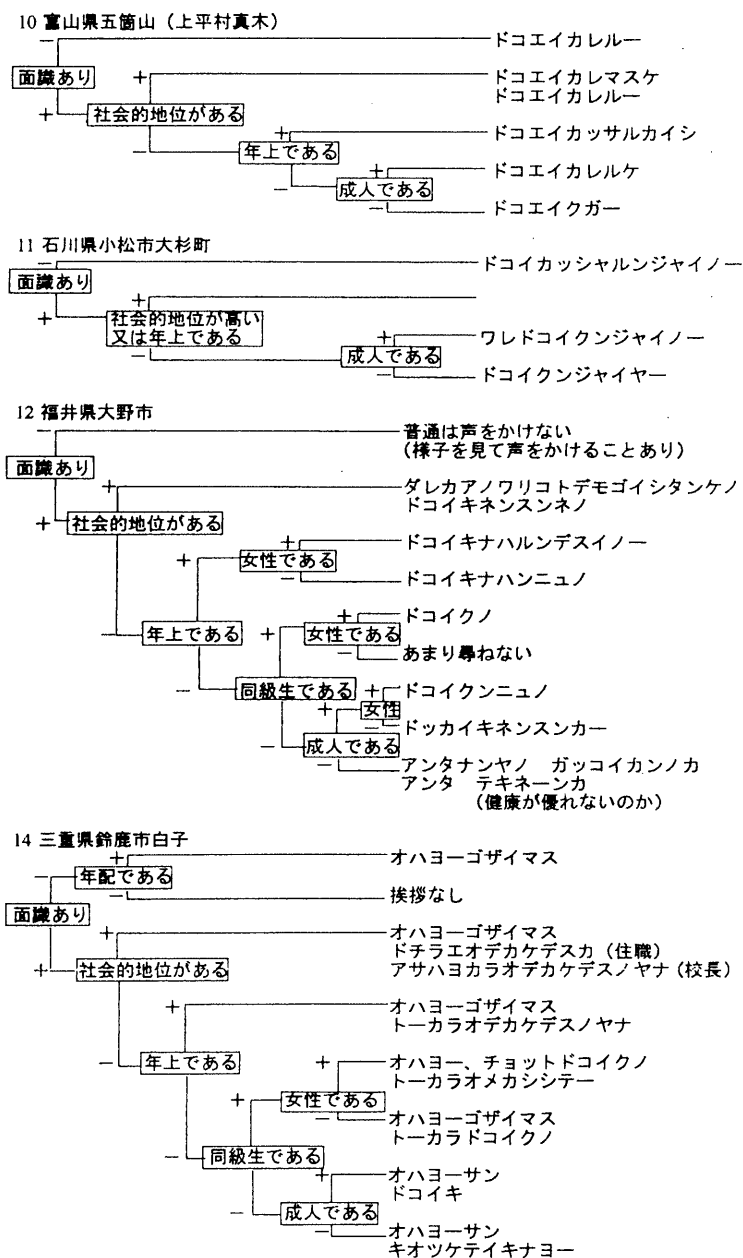


7 富山県富山市

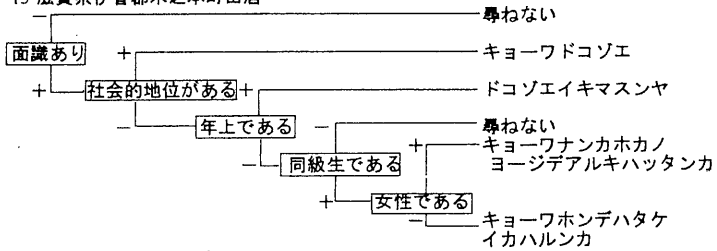


8 新潟県西蒲原郡四ツ郷屋

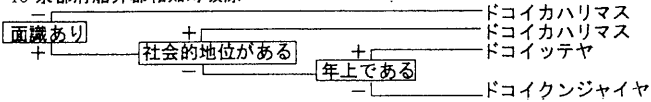




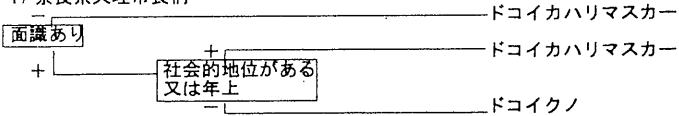
15 滋賀県伊香郡木之本町田居



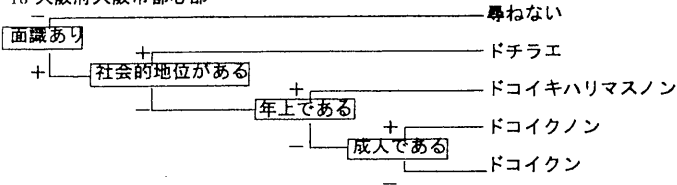
16 京都府船井郡和知町坂原



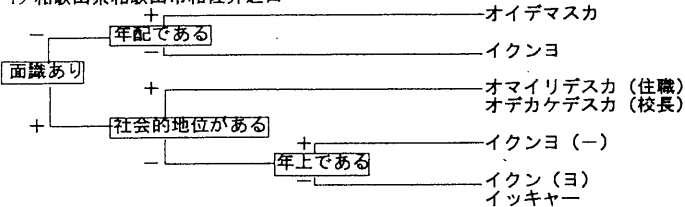
17 奈良県天理市長柄



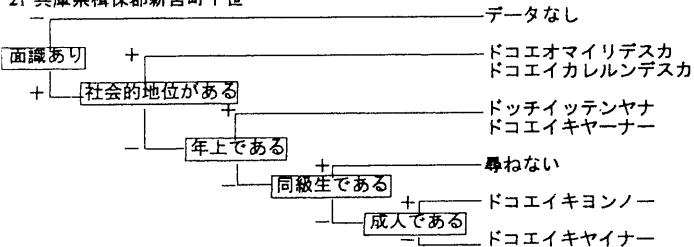
18 大阪府大阪市都心部



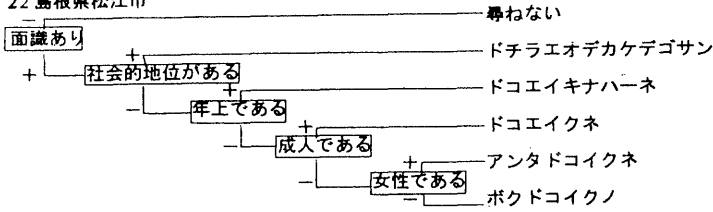
19 和歌山県和歌山市和佐井之口



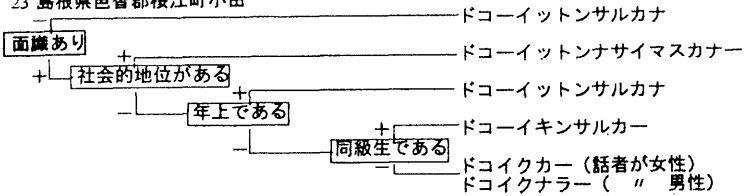
21 兵庫県構保郡新宮町下笹



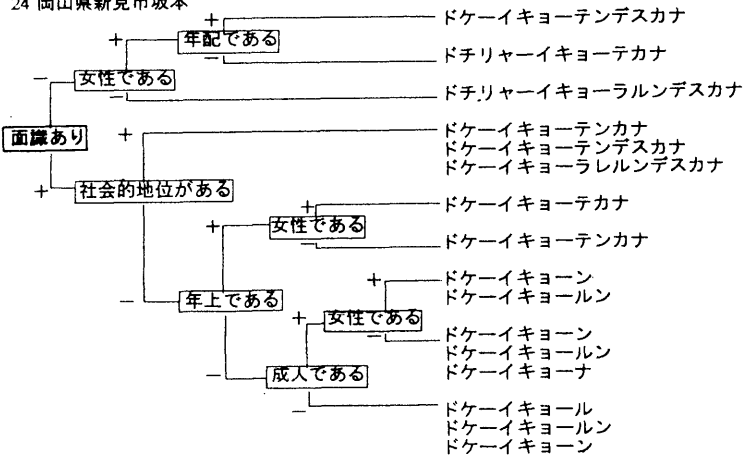
22 島根県松江市



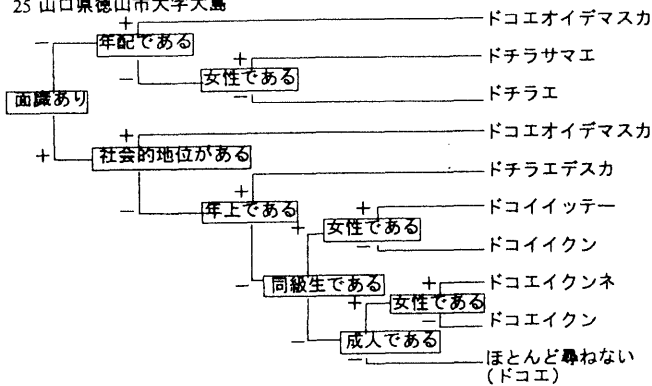
23 島根県邑智郡桜江町小田

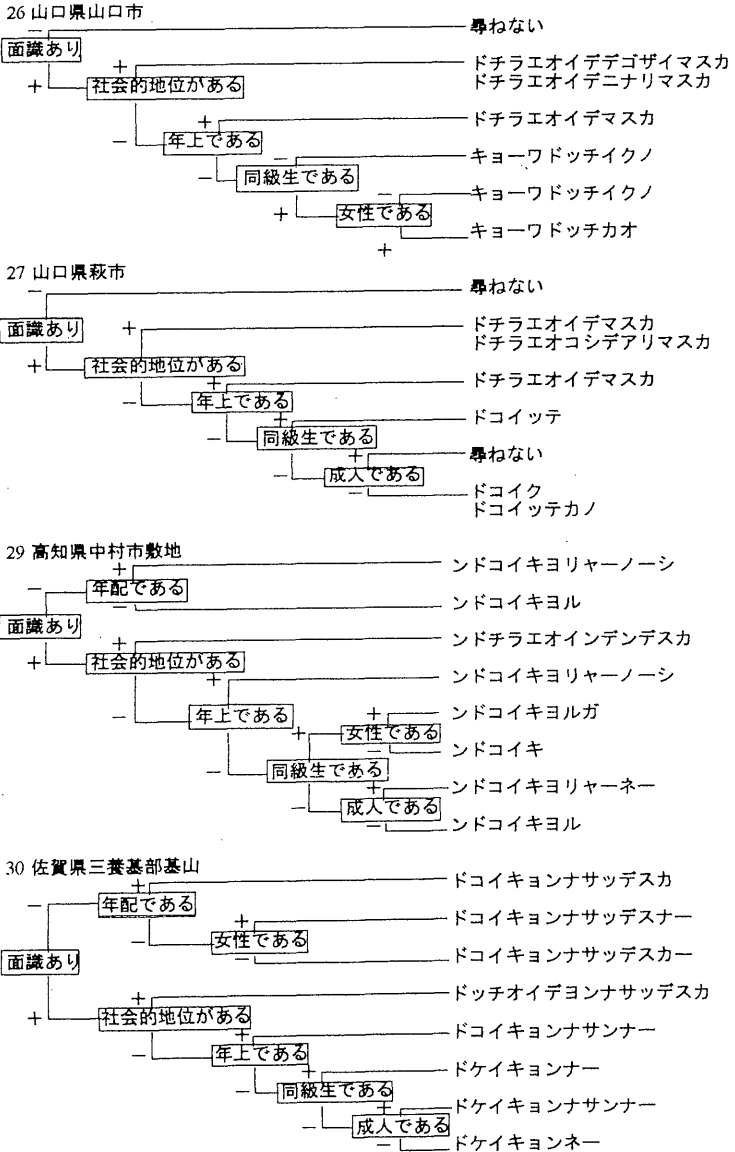


24 岡山県新見市坂本

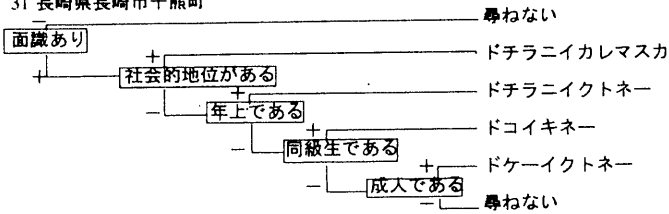


25 山口県徳山市大字大島

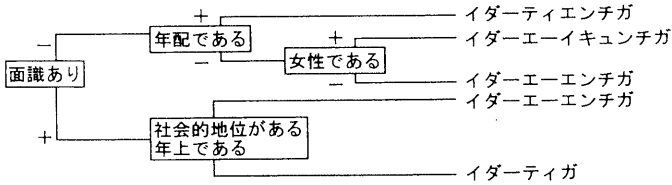




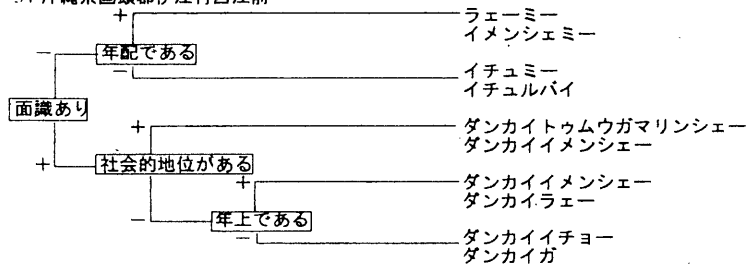
31 長崎県長崎市千熊町



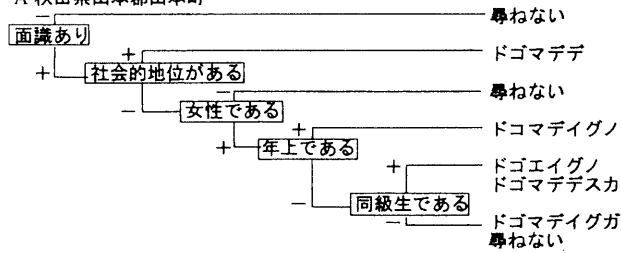
33 鹿児島県大島郡与論町



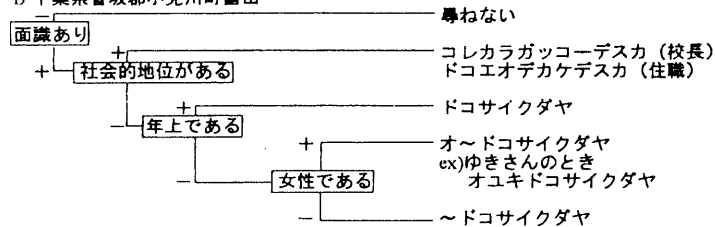
34 沖縄県国頭郡伊江村西江前



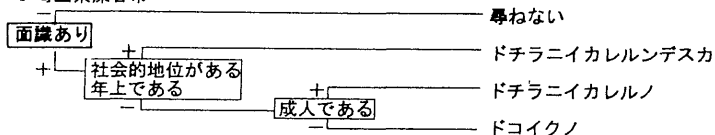
A 秋田県山本郡山本町



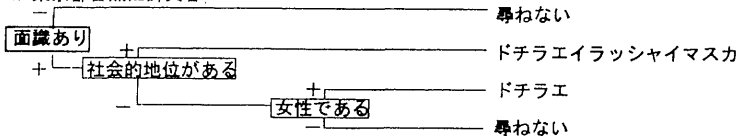
B 千葉県香取郡小見川町富田



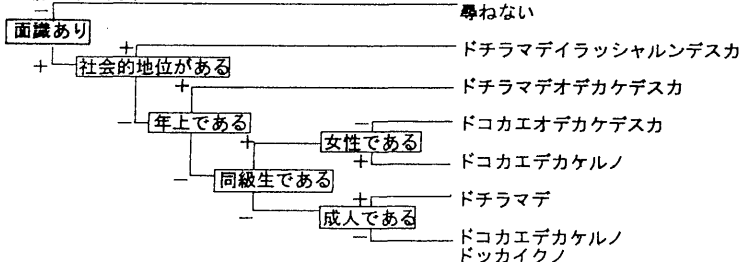
C 埼玉県深谷市



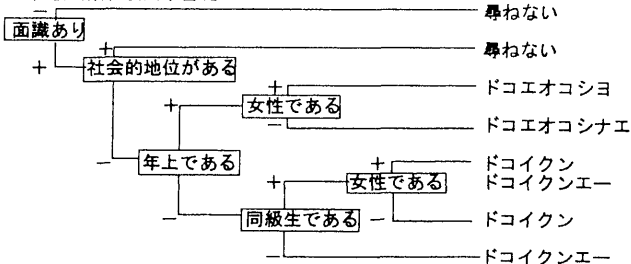
D) 東京都目黒区碑文谷



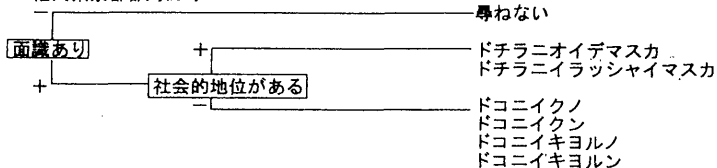
E 静岡県三島市



F 和歌山県和歌山市吉礼



G 福岡県京都郡苅田町



[文献]

- 井出 祥子他1986『日本人とアメリカ人の敬語行動』南雲堂
- 井出 祥子他1988「社会言語学の理論と方法—日本と欧米のアプローチ」『言語研究』93
- 江端 義夫1999「あいさつ交換儀礼の研究」『日本語学—11月臨時増刊号 地域方言と社会方言』
- 加藤 正信(1973)「全国方言の敬語概観」(『敬語講座 6 現代の敬語』明治書院)
- 菊池 康人1994『敬語』角川書店
- 篠崎 晃一・小林 隆1997「買物における挨拶行動の地域差と世代差」『日本語科学』2
- 中谷真由美1999「富山県黒部方言における待遇表現—多変量解析による社会言語学的考察—」齋藤孝滋編『地域言語調査研究法』おうふう
- 宮治 弘明1996「方言敬語の動向」小林隆他編『方言の現在』明治書院
- 1997「挨拶言葉の分布と歴史—家族との朝の出会いの挨拶—」『国文学』42-7
- 藤原 与一1992『あいさつことばの世界』武蔵野書院
- 森 朝男1999「古代貴族のあいさつことば」『国文学』44-6
- 小林 千草1999「中世武家のあいさつことば」『国文学』44-6
- 諸星 美智直1999「近世武家・町人のあいさつことば」『国文学』44-6
- 小泉 保1999「挨拶とコミュニケーションの文化」『国文学』44-6
- 橋元 良明1999「コミュニケーションにおけるあいさつの役割」『国文学』44-6
- 遠藤 好英1999「書簡のあいさつことばの歴史」『国文学』44-6
- 氏家 洋子1999「日本社会の出会い・別れのあいさつ行動」『国文学』44-6
- 伊藤 雅光1999「電子メール通信のあいさつ言葉」『国文学』44-6
- 陣内 正敬1999「地方の場合：九州・佐賀のあいさつことば」『国文学』44-6
- 沢木 幹栄・杉戸 清樹1999「世界のあいさつ言葉の対照研究に向けて」『国文学』44-6